

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號四第 卷一十二第

行發日一月十年四十四正大

論 叢

整稅案の一缺點としての負債利子の問題……………法學博士 神戸 正雄

八幡船考……………文學博士 新村 出

矢内原「アダム・スミスの植民地論」を讀み……………法學博士 山本美越乃

南京條約の以前治外法權問題に就いて……………文學博士 矢野 仁一

フツサールの現象學……………文學博士 米田庄太郎

自殺統計論……………法學博士 財部 靜治

時 論

勞働組合法案を評す……………法學博士 河田 嗣郎

說 苑

リカアドに於ける勞働價值法則の妥當性に就いて……………經濟學士 森 耕二郎

雜 錄

近世の土地分給政策……………經濟學博士 本庄榮治郎

都鄙別による離婚率……………經濟學士 岡崎 文規

（禁 轉 載）

フツサールの現象學 (四)

米田庄太郎

(五) 本質學の一般的論述

フツサール氏は前節に於て述べしが如き、事實(或は經驗)と本質並に個體的直觀と本質觀照(或は諦觀)との、一般的差別及び關係に關する同氏の見解に基いて、先づ事實學と本質學との一般的差別及び關係を概論し、更に本質學の概念を稍々詳しく論述して居る。そうして夫れによりて、一の本質學である可き純正現象學の觀念の建設の爲めに、又一切の經驗學に對して、かくて又心理學に對して純正現象學の占む可き地位の理解の爲めに、必要なる本質的基礎を究明せんとして居る。されば同氏の本質學の概念を先づ明らかに理解して置くことは、同氏の現象學の觀念を正當に理解する爲めに甚だ肝要である。更に今日フツサール氏の學問論を應用して、社會學の學問論的基礎附を企だてる人々の所説を考察すると、同氏の本質學と經驗學との區別が、甚だ重要なる意義を有することが觀破される。それで余は本節に於て稍々詳しく之を述べたいと思ふ。

却説さきに述べし處の個別的對象と本質との間に存立する關係に相應して、此處に事實學と本質學との相互關係が確立されるのであるが、今純正本質學とは例へば純正論理學、純正數學、純正時間論、純正空間論、純正運動論等の如きものにして、此等の諸學科は何れも其の一切の思惟進行に於て、全然事實或は經驗に拘束されないものである。換言すれば此等の諸學科にありては、何れの經驗も經驗としては、即ち現實態或は存在を把捉し或は設定する意識としては、毫も基礎附けの任務を行ふことが出来ない。それは例へば紙面に或圓形を畫く幾何學者に於て見られるが如くである。此の場合幾何學者は事實上存在する紙面に於て、事實上存在する線を産出する。併し彼の物質的産出も亦其の彼が産出せるものに就て彼の有する經驗も、經驗としては彼の幾何學的本質諦觀及び本質思惟を毫も基礎附けない。彼は紙面に畫ける事實上の線に就ての經驗によりて、始めて彼の幾何學的本質諦觀及び本質思惟を基礎附けるのではない。

然るに自然研究者にありては、事情は之れと全く異なつて居る。自然研究者にありては、經驗は實に基礎附ける作用(*der begründende Akt*)にして、夫れは決して純然たる想像によりて取り替へ得られるものでない。かくて事實學と經驗學とは同値的概念であるのである。さはれ現實態ではなくして觀念的可能、現實的關係ではなくして本質的關係を研究する幾何學者にありては、最後の基礎附ける作用は上に述べし如く經驗ではなくして、本質諦觀である。そうして一切の本質

學にありては、間接的に洞見的なる思惟に於ける間接的なるものも、實は全く直接的に洞見的なる原理に従ふて與へられて居るので、隨ふて直接的洞見に於て把握される本質關係或は本質的公理に基いて基礎附けられて居る。かくて其の間接的基礎附けの各歩は、ヤハリ明確的(apodiktisch)及び本質的に必然的であるのである。されば純正本質學の眞髓をなすものは、夫れは全く本質的に研究すると云ふこと、夫れは始めから又其の後の進行に於ても、如何なる事實をも本質的妥當性を有するもの、かくて直接原本的に與へ得られるものとして認識しないと云ふこと、或は如何なる事實をも右の如き「公理的」なる事實から純粹なる推理によりて「推斷」され得るものとして認識しないと云ふことである。

かくて吾人は精密本質學の實際的理想は、右の思想に甚だ密接に結び附けて立てられて居ることを見るので、そうして其の理想と云ふは、つまり一切の間接的思想進行を、夫れ／＼の本質的範疇の永久的組織的に結合されたる諸公理の下に於ける單純なる包攝、更に形式的論理學或は純粹論理學の全公理の下に行ける單純なる包攝に還元することによりて、各本質學に合理性の最高度を與へんとすることである。但し嚴密に云へば此の理想を實現することを始めて教へたる新數學であるのである。尙ほ所謂「數學化」(die Mathematisierung)の理想もヤハリ上の思想と密接に結び附いて立てられて居るので、此の理想も右に述べし理想と同様に、一切の精密本質學的諸學

科（其の全認識成分は例へば幾何學に於ける如く或小數の公理中に純演繹的必然性に於て還元されるのである）に對して、重大なる認識實際的意義を有するものである。

以上述べ來れる處によりて、本質學の精神は經驗學の認識成果との總ての關係を、根本的に排斥するものなることは明らかである。本質學の本質諦觀は經驗學の事實認識に基いて行なはれるのでなく、本來之れと獨立に行なはれるのである。事實からは常に只事實が生まれるだけで、本質は事實から生まれるのでない。一切の本質學は一切の事實學から根本的に獨立して居るのである。

然るに事實學にありては夫れと正反對の事情が認められる。即ち一切の事實學は根本的に本質學に依存して居るのである。學問として完全に發達せる事實學にして、本質認識から離れ得るもの、かくて形式的本質學又は質料の本質學（*formalen oder materialen eidetischen Wissenschaften*）から獨立し得るものは一も存しない。此處に其の理由の二つを簡單に述べて置くが、先づ第一に經驗學は、夫れが判斷の間接的基礎附けを成就せんとする何れの場合に於ても、常に形式的論理學が取扱ふ處の形式的原理に従ふて行かねばならぬ。又一切の事實學は何れの學問とも同様に一定の對象を有し、一定の對象を研究するものである以上、對象一般の本質に屬する諸法則によりて當然拘束されねばならぬ。かくて事實學は狹義の形式的論理學に依存する上に、更に夫れ以外

の形式的普遍的知識の餘地の諸學科を包括する形式的本體學的諸學科の群れと、密接なる關係に入り込むのである。尙ほ第二の理由として注意す可きは、各事實は一の實質的本質成分を含有するので、そうして其の中に含有される純粹本質に屬する各本質的眞理は、與へられたる事實的個體に、夫れが各可能的なるもの一般の如く依て以て拘束される或法則を、與へねばならぬと云ふことである。

夫れ各具體的經驗的對象は其の質料的本質を具有して、一の最高質料的類 (eine oberste materiale Gattung) 或は經驗的對象の一領域 (eine Region) の下に排置される。そこで各純粹領域的本質に對應して、一の領域的本質學 (eine regionale eidetische Wissenschaft) 或は一の領域的本體學 (eine regionale Ontologie) が成立する。此處に吾人は領域的本質に於て、或は之を構成する幾多の類に於て、豊富なる又多枝的なる知識が成立し、かくて其等の知識の組織的展開に關して一般的に一の學問を、或は領域の夫れ夫れの類構成物に對應して幾多の本體學的諸學科の一複合體を建設する事の重要なるを覺る。されば一領域の範圍に屬する各經驗學は、形式的本體學的諸學科に本質的に結び附けられると同様に、又領域的本體學的諸學科に本質的に結び附けられる。要するに吾人は各事實學或は經驗學は本質的諸本體學に於て、本質的理論的基礎を有すると云ひ得るのである。是れ上の假定が正しいとすれば、純粹なる無制約的に妥當なる仕方 に於て、領域の一切の

可能的對象に結び附けられる知識の豊富なる基本（其等の知識は一部分は對象一般の空虚なる形體に屬し、一部分は云はゞ一切の領域的對象の必然的質料的形體を表現する處の領域の本質に屬する以上）が、經驗的事實の研究に對して無意味であり得ないことは、全く自明的であるからである。

かくて例へば一切の自然科學的諸學科に對應して、物理的自然一般の本質學或は自然の本體學（事實的自然に對應して純粹に把捉し得られる一本質が存立する以上、即ち其の中に含蓄される處の無限に豊富なる本質關係を有する自然一般と云ふ本質が存立する以上）が成立するのである。吾人若し自然の完全に合理化されたる一經驗學の觀念、詳しく云へば其の中に取り込まれたる總ての特殊が、最普遍的及び最根本的なる基礎に悉皆還元されるほど、理論化に於て進歩せる一の自然科學の觀念を作るとすれば、かゝる自然科學の觀念の實現は、夫れに對應する自然の本質學或は自然の本體學の發達に根本的に依存すること、かくて夫れは一切の學問が一般的に同様なる仕方にて依存する形式的知識に依存する外に、特に自然の本質を、隨ふて又有るがまゝの自然對象の一切の本質種類を合理的純粹性に於て研究する處の、即ち本質的に研究する處の、實質的、本體學的諸學科の發達に依存することは、明白である。そうして右に述べし事は、何れの領域に就ても當てはまるのである。

又認識實際的にも吾人は始めから左の事を豫期す可きである。即ち經驗學は「合理的」階段、「精密」法則學的學問の階段に近づけば近づくほど、かくて發達せる本質學的諸學科を基礎として運用し、自分の基礎附けに就て其等の學科を利用する度合の大なるほど、ますます其の認識實際的作業の範圍及び力に於て増大すると云ふ事である。

合理的自然諸科學或は物理的諸科學の發達は、右の事實或は傾向を明らかに證明して居る。物理的諸科學の大隆盛時代は、實に近世に於て、既に古代に於て（本質的にプラトニー派に於て）純正本質學として大に發達せる幾何學が、物理學的方法に甚だ有効に適用されて來たと云ふ事から、まさしく始まつて居るのである。是れ物質的なる物の本質は延長にして、そうして幾何學はかゝる物質性的一本質要素即ち空間形式を研究する本體學的學科であるからである。併し吾人は又更に、物質的なる物の一般的或は領域的本質は延長だけで盡きず、遙かに夫れ以上に亘るものなるを覺る。そうして其の事は、學問の發達が幾何學と並立して、經驗的なるもの、合理化の爲めに夫れと同様なる任務に當る可き、新しき諸學科の一系列を發達させる方針に進んで居ることに於て、明らかに示されて居る。實に形式的及び實質的數學的諸科學の隆盛は、右の傾向から生まれて居るのである。其等の數學的諸科學は甚だ熱誠に、純正「合理的」諸科學として、即ち本質的諸本體學として發達させられ、或は新たに建設されて居るが、併し其の事は近世の始めに於ては、

又其後も尙は長らくの間、其等の科學夫れ自身の爲めではなく、經驗的諸科學の爲めに行はれて居る。されば其等の科學は又、己れと平行して進める驚嘆す可き合理的物理學の發達に於て、望まれたる果實を結んだのである。

以上述べ來れる處によりて、フッサール氏は同氏の本質學と稱するものを根本的に如何に考へて居るか、又之れと事實學或は經驗學との關係を根本的に如何に考へて居るかを、大體上理解することが出来るのであるが、更に本質學の構造に關する同氏の説を述べて、一層深く同氏の本質學の意味を究明したいと思ふ。

今何れかの本質學に立ち入りて考へて見ると、例へば自然の本體學に立ち入りて考へて見ると、此處に吾人は諸對象として本質を考察するのではなく、自然と云ふ領域に屬する本質の諸對象を考察して居るのである。併し此の場合に吾人は、「對象」とは種々なる、されど相屬的なる諸形態 (Gestaltungen)、例へば「物」「性質」「關係」「實質」「集合」「順序」等の如きものの一稱號であること、又其等のものは明らかに相互に並立せずして、夫れ夫れの場合に於て云はば原對象性 (Urgegenständlichkeit) の特權を有する一種の對象を指示し、其の對象に對して總て他のものは或意味に於て單なる變化或は變形と見做されることを觀察するのである。自然の本體學に於ては「物的性質」「關係」其他のものに對して、「物」に右の特權が與へられて居る。併し此の事はま

さしく一定の形式的構造の一部分にして、そうして其の形式的構造を説明しなければ、對象に就ての論説も亦對象領域に就ての論説も、共に混雜紛糾を脱することが出来ない。それで是れより其の説明を與へんとするのであるが、其の説明からして又領域の概念に結び附いて居る重要な一概念、範疇の概念が、自から生まれるであらう。但し範疇とは一方に於ては「一領域の範疇」と云ふ結合語に於て、其の關係する領域例へば物理的自然と云ふ領域を指示し、併し他方に於ては夫れ夫れの一定の質料的領域を領域一般の形式に、或は對象一般と云ふ形式的本質及び之れに屬する「形式的範疇」に、關係させる語である。

先づ注意すべきは形式的本體學と質料的本體學との區別及び關係である。一方に於ては質料的領域が存立する。そうして夫れは一定の意味に於ては嚴密に云ふ處の本質である。併し他方に於てはヤハリ本質的であるが、しかも前者とは根本的に異なるものが存立する。夫れは一の純粹なる本質形式にして、一の本質ではあるが全く「空虚」なるもの、或は空虚なる形式の仕方にして一切の可能的本質に適合する本質、其の形式的普遍性に於て總ての質料的普遍者（最高のものを含む）を包攝し、其の形式的眞理によりて之れに法則を與へる本質である。かくて所謂「形式的領域」なるものは質料的領域と同列にあるものでないので、夫れは嚴密に云はゞ領域ではなくして、領域一般の空虚なる形式である。夫れは一切の領域を己れと同列に有するのでなく、己れ

の下に有するのである。そうして形式的なるものに質料的なるものが從屬する右の關係は、左の事項に於て表示されて居る。即ち形式的本體學は同時に一切の可能的本體學の諸形式を一般的に包藏すると云ふこと、夫れは質料的諸本體學に對して、彼等の總てに共同的なる一の形式的構造を指定すると云ふこと。右の事項の中に又、領域と範疇との區別に就て吾人の研究せねばならぬものが含まれて居るのである。

今形式的本體學から考察し始めるが、既に述べし如く形式的本體學は對象一般の本質學である。此の本體學の精神に於ては對象は總てある。そうして對象に對して無限に多様な真理(知識の多數の學科に配分される處の)が立てられ得る。併し其等の真理は總て、直接的真理或は「基礎真理」(純正論理學的諸學科に於ては公理として作用するもの)の多數の基本に還元されるものである。そうして其等の公理に於て現はれる純正論理學的基礎概念を、余輩は論理的範疇或は對象一般と云ふ論理的領域の範疇として規定する。但し其等の純正論理學的基礎概念によりて、對象一般の論理的本質が公理の全體系に於て規定されるのである。或は其等の基礎概念はあるがまゝの對象の無制約的に必然的又構成的なる規定を表現するものである。そうして純正論理的なるものは、余輩が絶對的精密に限定する其の意味に於ては、「總合的なるもの」に對する「分析的なるもの」の哲學的に唯一の重要なる(確かに根本的に重要なる)概念を規定するものであるから、

余輩は其等の範疇を分析的範疇と稱することが出来る。

かくて論理的範疇の例として挙げられるものは、「性質」「實質」「關係」「同一性」「同等性」「集合」「計數」「全體と部分」「類と種」其他の如き概念である。併し意義範疇 (die Bedeutungskategorien) 即ち命題或は文章、文章諸部分及び文章諸形體の諸種の、文章の本質に屬する基礎概念も亦論理的範疇に屬する。そうしてそれは「對象一般」及び「意義一般」を相互に結び付ける處の、殊に純粹意義眞理が純粹對象眞理に轉化される様に結び附ける處の本質眞理に關して云はれるのである。まさしく夫れが爲めに、文章の論理學 (die apophantische Logik) は、全く意義に就て言明するに限るとするも、尙ほ包括的意味に於てはヤハリ形式的本體學に屬するのである。さばれ吾人は意義範疇を夫れ自身特別な一部類として區別し、之を含蓄的意味に於ける形式的對象的範疇としての餘他の範疇に對立させねばならぬ。

余輩は此處に尙ほ注意したきものがある。それは吾人は一方に於ては範疇を意義の意味に於て概念と解し得るが、併し他方に於ては、且つ一層よりよく、其等の意義に於て表現する形式的本質其物と解し得ると云ふことである。例へば「實質」「多」「同一性」其他の範疇は、結局はつまり實質一般、多一般、同一性一般等の形式的本質を意味するのである。併し右の意味曖昧は只人々が何處に於ても區別されねばならぬもの、即ち「意義」と意義によりて表現し得るもの、更に意義と

意味されたる對象とを、純粹に區別するを學ばなかつた以上に於てのみ危険である。そうして吾人は術語的に範疇的概念(意義として)と範疇の本質とを明らかに區別し得る。

吾人は更に對象一般の範域に於て、一の重要な區別を立てることが肝要である。それは意義の形式論内に於ては「文章論的形式」と文章論的基礎體或は「材料」(Syntaktischen Formen und syntaktischen Substraten oder Stoffen)との間の、純文法的區別に於て反映されて居る區別にして、之れによりて文章論的範疇と基礎體範疇(syntaktischen Kategorien und Substratkategorien)とに於ける形式的本體學的範疇の一分化が表示されて居るのである。左に此の區別に就て少しく述べて置く。

今余輩は文章論的對象とは、「文章論的形式」によりて他の對象から導き出されたるものであると解する。そうして其等の形式に對應する範疇を、文章論的範疇と稱するのである。かゝる範疇に屬するものは例へば「實質」「關係」「性質」「一」「多」「計數」「順序」「序數」其他の範疇である。要するに各對象は説明し得られ、他の對象に結び附け得られる以上、つまり論理的に規定し得られる以上、種々なる文章論的形式をとり、そうして規定する思惟の相關者として段々により高き階段の諸對象(諸性質及び性質附けられたる諸對象、幾多對象間の關係、一の多、順序の諸項、序數規定の運載者としての對象其他)が構成されるのである。思惟が斷定的であるならば、文章

論的諸對象を其の一切の組織及び形式に準じて充分夫れに對應する意義構成し於て反映する處の、文章及び之れに屬する文章的意義構成物が、順々に生長する。更に其等の「範疇的對象」は對象一般の如く範疇的構成物の基礎體として作用し、又其等の範疇的構成物は夫れ以上の範疇的構成物の基礎體として作用し得る。併し又之れと反對に、かゝる構成物の各々は明らかに最後の基礎體、第一及び最低階段の對象、かくて最早文章論的範疇的構成物ではない處の對象、思惟作用の單なる相關者たる其等の本體學的形式を最早夫れ自身の中に全く含まない處の對象を指示する。かくて對象一般と云ふ形式的領域は、最後の基礎體と文章論的對象とに分たれる。余輩は後者を對應する基礎體の文章論的派生物(導き出されたるもの)と稱する。そうして下に述ぶる如く、一切の「個體的なるもの」も亦右の基礎體に屬するので、吾人が個體的性質とか個體的關係とか云ふ時には、此等の派生對象は云ふまでもなく夫れが導き出されたる基礎體の爲めに、然か稱せられるのである。

吾人は尙ほ更に本質の全範圍に亘る範疇的區別の新しき一部類を立てる必要を認める。夫れ各本質は實質的なる本質であるか、又は空虚なる(かくて純粹論理的なる)本質であるかを問はず、本質の一の階段的系列中に、即ち一般性と特殊性との一の階段的系列中に、排置されるものである。そうして其の系列には二つの決して合致しない極限が必然的に存在する。吾人は下降的には

最低の特殊の差異或は本質的特異 (die niedersten spezifischen Differenzen oder die eidetischen Singularitäten) に到達し、上昇的には幾多の種本質及び類本質を通じて、一の最高類に到達する。本質的特異はより一般的なる本質を、其の類として夫れ自身の上に必然的に有するが、併し夫れ自身の下には最早夫れが種又は類と認められる何等の特殊化をも有しない本質である。同様に最高類は、夫れ自身の上に最早何等の類をも有しない本質である。

右の意味にて、意義の純粹論理的範域に於ては「意義一般」は最高類にして、規定されたる各文章形體、各文章部分は本質的特異、そうして文章一般は媒介類である。同様に計數一般は一の最高類にして、二、三其の他の數は最低差異或は本質的特異である。又實質的範域にありては例へば物一般、感覺的形質一般、空間形體一般、體驗一般等は最高類にして、規定されたる物、感覺的形質、空間形體、あるがまゝの體驗等に屬する本質成分は、本質的又實質的特異である。

右の類と種とによりて表示される本質關係に於ては、特殊なる本質中により一般的なるものが直接又は間接に包有されて居る（本質的直覺に於て其の特性に従ふて把捉さる可き一定の意味に於て）。されば夫れが爲めに多くの研究者は、本質的類と種との關係を「全體」と「部分」と關係の下に行なはれる本質的特殊化と認める。此の場合には「全體」と「部分」は「包有するもの」と「包有されるもの」との最廣概念に解せられるので、そうして本質的種關係は其の一特殊である。

かくて本質的特異は夫れ自身の上に存立する一般的なるもの、總體を包含し、そうして其等の一般的なるものは又階段的に「相互の中に存在」する、即ちより高き一般的なるものは、より低き一般的なるもの、中に存在するのである。

右に述べし處によりて考ふれば、一般化と特殊化との關係 (die Verhältnisse der Generalisierung und Spezialisierung) は、實質的なるものを純粹論理的に形式的なるものに普遍化すること (die Verallgemeinerung von sachhaltigem in das reinlogisch Formale) 或は夫れと反對に一の論理的に形式的なるものを實質化すること (die Versachlichung eines logisch Formalen) の關係とは、本質的に異なるものにして、吾人は兩者を嚴格に區別せねばならぬ。換言すれば一般化は形式化 (die Formalisierung) 例へば數學的解析に於て重大なる役目を演ずるが如き) とは全然異なる或物にして、又特殊化は非形式化 (die Entformalisierung) 或は論理的數學的空虛形式即ち形式的真理の充實 (die Ausfüllung) とは全く異なつて居る。

かくて一の本質が一の純粹論理的本質の形式的普遍性の下に立つこと、一の本質が其のより高き本質類の下に立つことは、決して混同されてはならない。例へば一方に於ては三角と云ふ本質は空間形體と云ふ最高類の下に、又赤と云ふ本質は感覺的形質と云ふ最高類の下に置かれる。併し他方に於ては赤、三角及び總ての異質的本質も同質的本質と同様に、「本質」と云ふ範疇的稱

號 (der kategoriale Titel) の下に置かれるが、其の範疇的稱號たる「本質」は、其等の本質の總てに對して決して一の本質類の性質を有しない、恐くは其等の本質の何れのものに關しても右の性質を有することはあるまい。されば右の「本質」を實質的本質の類と見るは正當でないので、それは對象一般(空虛なる或物)を各種の對象の類と誤解すること、更に之を唯一の最高類、一切の類の類と誤解すること、まさしく同様である。吾人は寧ろ一切の形式的本體學的範疇を、「形式的本體學的範疇一般」と云ふ本質に於て其の最高類を有する、本質的特異として表示せねばならぬであらう。

右に述べしと同様に、各一定の推論、例へば物理學上の一推論は、一の一定の純粹論理的推論形式の個別化であること、各一定の物理學的命題は一の命題形式及び其の他の形式の個別化であることは明らかである。併し其等の純粹形式は實質的命題或は推論に對して類であるのでなく、只命題と云ひ推論と云ふ純粹論理的類(總て同様なる類の如く、「意義一般」と云ふ其の卒直に最高なる類を有するもの)の最低差異に過ぎない。かくて論理的空虛形式の充實(普遍的知識に於ては空虛形式以外のものは存しない)は、最後の分化に至るまでの真正なる特殊化に對立する處の、全然異なる「手術」或は運用である。此の事は何處に於ても認めらる可きである。例へば空間から「ユークリッド的多様性」への移行は、決して一般化ではなくして、一の形式的「普遍化」であ

右の根本的區別の證據を立てるには、吾人は總てかゝる場合に於ける如く、本質直覺に遡らねばならぬ。そうして本質直覺は直ちに左の事を吾人に教へるのである。即ち論理的形式本質（例へば範疇）はかの一般的赤が種々なる赤の濃淡の中に、或は「色」が赤や青やの中に存する如くに、實質的個別化の中に存するのではないこと、及び一般に論理的形式本質は、普通に狭き意味に解される部分關係に就て云はれる處の、「包有されて居る」と云ふ意味にて、實質的個別化の中に存するものでないこと。そうして以上述べしことがよく理解されるれば、一の個體的なるものが、一の本質の下に攝容されること（Subsumption）と、一の本質が其のより高き種或は一の類に従屬すること（Subordination）とは、決して相混同されてはならぬことを明らかにする爲めに、別に詳しく論辯を要しないと思ふ。尙ほ範圍（der Umfang）と云ふことに就て少しく説明して置きたいが、先づ最低差異でない各本質は一の本質的範圍、即ち特殊的なるもの又最後には本質的特異の一範圍を有する。他方に於ては各形式的本質は其の形式的或は「數學的」範圍を有する。更に各本質は一般に其の個體的個別化の範圍、即ち夫れが結び附け得られる數多の可能的「此の此處にあるもの」の一の觀念的總體を有する。そうして經驗的範圍と云ふはより以上を意味する。即ち一の存在範域（eine Daseinsphäre）に限定すること（夫れと結び附く處の、純粹普遍性を除去する一の存在設

定 eine Daseinssetzung) によりて) を意味する。但し右に述べし總ては、云ふまでもなく本質から意義としての「概念」に移されるのである。

余輩は尙ほ更に「充實せる」、「實質的なる」基礎體及び夫れに對應する「充實せる」、「實質的なる」文章論的對象と、空虚基礎體及び夫れから作られる文章論的對象、空虚なる或物の變化或は變形との區別を重要視する。但し空虚基礎體と云ふは決して、本來何等の内容をも有しない全く空なるものと云ふ意味でない。夫れは普遍的知識としての純正論理學の所有物に屬する實質關係、及び夫れから建設される一切の範疇的對象の總體として規定されるのである。かくて何れかの推論式的或は算術的公理或は定理の言表する各實質關係、各推論形式、各計算數、各數構成物、純粹解析の各函數、夫れに於て定義されるユークリッド的或は非ユークリッド的多様は、空虚基礎體に屬するのである。そうして實質的對象の部類に就て考へると、吾人は一切の文章識的構成物の中核として最後の實質的基礎體に到達する。基礎體範疇は此の中核に屬するものにして、二つの離接的主稱號の下に分類される。其の一は「實質的最後本質」にして、其の二は「此の此處にあるもの」或は純粹なる、文章論的に無形式的なる、個體的なる個別である。そうして兩者の間に存する本質的結合は左の如くに云ひ表はされねばならぬと思ふ。即ち「此の此處にあるもの」は總て、上に述べし意味での一の無形式的基礎體本質の性質を有する處の、其の實質的本質成分を

有するものである。

余輩は尙ほ更に一の基礎的區別を立てねばならぬが、夫れは獨立的對象と非獨立的對象 (Selbständige und unselbständige Gegenstände) との區別である。例へば範疇的形式は、夫れが形式である處の一の基礎體を必然的に指示する以上、非獨立的である。基礎體と形式とは相互に他に依存するものにして、一を離れては他は考へ得られない。かくて此の最廣義に於ては、純粹論理的形式例へば對象と云ふ範疇的形式は總ての對象質料に關して、又本質と云ふ對象は總ての規定される本質に關して非獨立的である。余輩は其等の非獨立的なるものから目を轉じ、非獨立性或は獨立性の含著的なる概念を、嚴密に云ふ「内容的」結合、即ち「包有されること」「一致すること」、及びより嚴密なる意味での「結合されること」の關係に、結び附けて考へて見よう。

此處に余輩が特に興味を感じるは、最後の基礎體、一層嚴密に解すれば實質的基礎體本質に於ける實狀である。今其等の基礎體に對して二つの可能性が成立する。一はかゝる一本質は他の本質と相合して、一の本質の統一性を確立すると云ふことにして、他はそうしないと云ふことである。前者の場合に於ては、一方的或は相方的非獨立の關係が生じ、そうして統一されたる本質に屬する本質的個別及び個體的個別に關して、明確的に必然的なる左の歸結が生ずる。即ち一本質の諸個別は、他の本質と少なくとも類共同性を有する本質によりて規定されるに非らずば、存在し

得ないと云ふことである。例へば感覺的形質は、廣がりの或差異を必然的に指示し、そうして又廣がりとは必然的に、夫れと一致し、夫れを被覆する或形質の廣がりである。強度の範疇の「増上」要素は只一形質に内在的であるとしてのみ可能であり、そうしてかゝる類の一内容は何等かの増上度合なくば考へ得られない。一定の類被規定性の體驗としての一の顯現は、「あるがまゝ」に一の顯現するもの」の顯現としてゝなくば、不可能である。

右に述べし事からして今個體、具象體及び抽象體 (Individuum, Konkreum und Abstraktum) 等の形式的範疇的概念の重要な規定が生ずる。要するに抽象體とは非獨立的本質を意味し、具象體とは絶對的に獨立なる本質、そうして個體とは其の實質的本質が具象體である處の「此の此處にあるもの」を意味するのである。尙ほ一般化の作用或は操作を、今や擴張されたる論理的變化或は變形の概念の下に把捉すると、吾人は個體とは純正論理學的に要求される原對象、一切の論理的變形が指示する處の、論理的に絶對的なものであると云ふことが出来るのである。

具象體は明らかに一の本質的特異 (eine eidetische Singularität) である。但し種及び類は普通には最低差異を排除する意味に解されて居るので、原則的には非獨立的である。それで本質的特異は抽象的なものと具象的なものとに分れる。

一の具象體の中に選言的に包有される本質的諸特異は、形式的本體學的法則(同一の類の二つの

本質的特異は、一の本質の統一に於て結合され得ない、或は一の類の最低諸差異は相和合しない）から考ふれば、必然的に「異質的」である。かくて一の具象體に入り込む各特異は、差異として考へられると、種及び類の別々な體系、随ふて別々な最高類に導かれる。例へば一の現象物の統一に於て、規定されたる形體は空間的形體一般の最高類に導かれ、規定されたる色は視覺的形體一般の最高類に導かれるのである。されど具象體に於ける最低差異は又離接的或は選言的ではなくして包括であり得る。例へば物理的性質は空間的規定を前定し、之を夫れ自身の中に包含する。かくて最高類も亦離接的でない。

尙ほ類は特有な基本的な仕方にて、其の下に具象體を有するものと、抽象體を有するものとに別たれる。かくて吾人は具象的類と抽象的類とを區別し得る。具象的類とは例へば現實的なる物、視覺的想像（感覺的に充實されて現はれる視覺的形態）、體驗などの如きものにして、抽象的類とは例へば空間形體、視覺的形質などの如きものである。

今上に述べし個體及び具象體の概念によりて又、領域の學問論的基本概念が嚴密に「分析的」に決定される。要するに領域とは一の具象體に屬する最高の類統一全體、かくて具象體内の最低諸差異に屬する諸般の最高類の本質統一的結合に外ならぬ。そうして領域の本質的範圍は其等の類の諸差異の具象的に統一化されたる複合の觀念的全體を包有し、其の個體的範圍はかゝる具象的

本質の可能的個體の觀念的全體を包有するのである。

各領域の本質は「總合的」なる本質真理、即ち此の類本質としての領域的本質に基づくが、併し形式的本體學的真理の單なる特殊化ではない處の本質真理を規定する。かくて其等の總合的真理に於ては領域的概念及び其の領域的變種 (die regionalen Abartungen) は自由に變換されることが出來ず、夫れ夫れ規定されたる言葉を、不規定的な言葉によりて取り代へることは、一切の「分析的」必然に於て見られる如くに、何等の形式的論理的法則をも生じない。そうして領域的本質に基づく總合的真理の總體は、領域的本體學の内容を形造るので、其等の真理中の基本真理、即ち領域的公理の總體は領域的範疇の總體を限定するのである。此等の概念は概念一般の如く單に純正論理的範疇の特殊化を表現するだけでなく、實に領域的公理の力によりて、領域的本質に特有のものを表現すると云ふこと、或は領域の個體的對象に「先天的」及び「總合的」に適合せねばならぬものを、本質的普遍性に於て表現すると云ふことによりて、特質附けられるのである。かゝる純正論理的でない概念の與へられたる個體に於ける適用は、一の明確的及び無制約的に必然的なるものにして、更に領域的(總合的)公理によりて規制されるものである。

かくてカントの理性批判(基本的見解に於ては重大なる差異存するが、併し其等の差異は一の内部的親縁を排斥しない)と調和を保たんとするならば、吾人は先天的總合知識とは、つまり領

域的公理であると解す可きであらう。吾人は又領域の部類のあるだけ、かゝる知識の不可還元的部類を有するであらう。「總合的基本概念」或は範疇は領域的基本概念であるであらう、そうして吾人は領域が區別さる可きだけ、相異なる範疇部類を有するであらう。

此處に外面的には形式的本體學は領域的(嚴密に「質料的」、「總合的」なる)諸本體學と同列に入る。「對象」と云ふ其の領域的概念は形式的公理體系を規定し、又夫れによりて形式的(分析的)範疇の總體を規定する。そうして其の點に於て、兩者の間に著しき本質的差別あるに拘らず、實際上兩者の平行が正當とされる理由が、認められるのである。

却説是れまで述べ來れる考察は、總て純正論理學的な考察であるので、夫れはつまり純正論理學の地盤に於て、純正論理學から出發して見定められる處の、一切の可能的認識或は認識對象の基本構造の一片として、一の型シエ即ち依て以て個體が先天的總合原理の下に於て、概念及び法則に従ふて、規定されねばならぬ處の一の型、或は一切の經驗學が單に總ての學に共同的なる純正論理學だけを基礎としてではなく、彼等に屬する領域的諸本體學をも基礎として建設されねばならぬ事を明らかにする一の型を、素描せんとせるものである。

併し同時に夫れからして一の課題或は問題の觀念が生起する。夫れは吾人の個體的直觀の圈内に於て、具象化の最高類を決定し、一切の直觀的個體的實在を、實在諸領域に従ふて完全に配分

すると云ふことである。但し各實在領域は根本的に（最根本的本質理由から生起するが故に）區別されたる一の本質學及び經驗學を指示するのである。併し右の根本的配分は、決して諸學の交錯及び部分的推移を禁じない。かくて例へば「物質」と「心意」とは相異なる實在領域であるが、しかも後者は前者に於て基礎附けられ、そうして夫れよりして自オナツから、心意論が身體論に於て基礎附けられることになるのである。要するに學問の根本的分類の問題は、主として領域の分別の問題である。

却説フッサール氏は、一の本質學たる可きものと見る純正現象學の觀念の建設、并に一切の經驗學（かくて又心理學）に對して占むる斯學の地位の理解の爲めに必要なる本質的基礎として、事實及び事實學と對立する本質及び本質學に就て、是れまで述べし如くに、一般的に論述して居るのである。そうして余はさきに述べし如く、右の思想はフッサール氏の現象學の概念を深く理解し、且つ今日試みられつゝある社會學或は社會哲學に於ける現象學的方法の應用の意味を、根本的に理解する爲めに、甚だ重要な意義を有するものと考へるから、此處に之を比較的に詳しく説述したのであるが、是れより進んで同氏の現象學の觀念を簡單に説述し、更に同氏自身は之を社會學或は社會哲學の建設の爲めに、如何に適用せんとして居るかを考察したいと思ふ。